

墓 参

新井 宏

韓国国立慶尚大学のある晋州市は、釜山の西に百キロ、今は人口三十万人の学術都市に過ぎないが、かつては朝鮮南部の政治、経済、文化の中心地であった。明峰智異山に源を持つ南江が中心街をうねり、壬辰倭乱（文祿の役）の時に、近隣の住民達が六万名、立てこもり全滅した悲劇の晋州城はその北側の畔にある。

姜東湖先生の墓地は、その晋州城の北十キロほどの山間の地にある。集賢面と鳴石面の境界に位置する峠の斜面に百坪以上はあろうか、立派な石組みの上段には姜先生の御尊父と御母堂の円墳墓がふたつ並び、右端に御尊父の事績碑が建っている。末広がりになっている中段も石組みで支えられていて、第二世代の墓所に当てられ、その左端に長男である姜東湖先生の墓銘碑と円墳墓がある。下段はまだ整地されていないが第三世代の墓所予定地である。南面した墓所からは、姜先生が生まれ育った鳴石面の旺旨里が一望できる。

姜家はこの地域の名家だった。墓所を含む一帯の姜家の山林からは良質な砂利が採れて、大い

に潤ったと聞いたことがある。鳴石面のいわれも豊富な石材によるのかも知れない。

もう十回以上は通ったであろうか。姜東湖先生が亡くなられてから四年、晋州市滞在中の休日と言えば、自然と足が向う。バスも時折通うが、大学宿舎のゲストハウスから往復二十五キロ位を歩くのが真の墓参のように感じている。

いくつもあるルートの中で、最も気に入っているのは、新しくできた山間の自動車道である。日本よりも更に道路建設狂の韓国では、めったに車が通らぬ立派な道路が次々にできている。姜先生を想いながらの散策には好適である。

散策を兼ねての墓参は、今度で終りになるかも知れない。最初、妻から二年間の許可を貰って始めた韓国通いも既に八年目。妻に言われるまでもなく、七十歳は引き際である。大学側では、大学院コースでの外国人教授を必要としていくとかで、残ってほしいと言ってくれるが、引き止められる内が華である。

そうは言っても、あまり身勝手もできず、大学側の事情も考慮して、名目だけはあと半年ほど任期を延長したが、もう長く滞在することはあるまい。

思えば、私の韓国生活はまったく姜東湖先生のお陰であった。『まぼろしの古代尺』と言う本を書いて、朝鮮半島に起源を持つ「古韓尺」を世に初めて紹介したのが十六年前。この本が韓国で翻訳されていたこともあり、慶尚大学で講演をする機会があり、日本文化研究所長をされてい

た姜先生から経歴を知らせるようにとの連絡が入ったのが平成十二年の夏。

ここで事前にハングルで準備していた自己PRの履歴書が役に立った。定年後、韓国で歴史や考古学の研究をしたいとの希望を持っていること、その代わりに、金属工学ではちょっとした勲章を持ち民間企業で技術系役員として働いた経験もあるので、大学院生や企業人にユニークな教育ができることなどを、少し大げさに書いておいた。韓国語を学んでいることももちろん強調しておいた。

ここが姜先生の素晴らしいところであった。早速、金属工学科の主任教授の許甫寧先生と相談し、どんな形式であれ、「新井先生を招聘すること」を直ちに決めてしまわれたのである。

晋州の春は遅い。まだ緑が灌木や枯れ草に埋まったままで、まったくの冬景色である。しかし、墓地に向う道筋の陽だまりにはひっそりと緑が芽生えていて、まもなく一斉に芽吹く時の美しさを予感させてくれる。

姜先生が生まれ育った故郷の旺旨里から市内の晋州中学校に通ったのは、この自動車道に平行して走る旧道沿いである。自転車も使ったように聞いているが、登り降りの多い坂道であり、片道一時間はかかったのではなからうか。

歩きながら想い起こすのは、姜先生の、ちょっとはにかみを浮かべた凛々しい写真姿である。実に写真映り良い方であった。おそらく、少年時代も紅顔の美少年で、息を弾ませて通った道筋が似合っていたであろう。

姜東湖先生は一九三一年十二月三十日生まれである。太平洋戦争が終わったのが中学一年生の夏であり、授業よりも晋州市に隣接する泗川飛行場の建設に動員される日々であった。当時、晋州市には日本人が多く住んでおり、晋州中学校は主として日本人のための進学校であったが、現地育ちでも成績優良者は入学を許されていた。後に、日韓親善に大きな役割を果たす晋州会の中心メンバーは、この晋州中学校の同窓生たちである。

戦後六年制となった晋州中学校を卒業した姜先生は、一九五一年の秋にソウル大学の法科大学に進む。その前年の六月二十五日に始まった朝鮮戦争は、国連軍が釜山まで追い詰められた後に、米軍の仁川逆上陸と北進で、今度は中国が参戦、戦局は膠着状態になっていた。ソウル大学も釜山に避難している最中であつたが、休戦協定の成立を経て、大学もソウルに戻り一九五六年には卒業して法学士となる。

韓国には戦前ソウル大学しかなかった。太平洋戦争後の米軍の軍政下で急遽いくつかの大学が認可されたが、質的にはソウル大学に比すべくもなく、独立後を支えるべき知識人層は極めて手薄であつた。

姜先生が、新設なつた国立慶尚大学教授に迎えられたのは卒業後間もなくの一九五九年である。一九八一年から十年間、法経大学学長、法科大学学長などの要職を歴任されたが、脳出血とその後遺症のためいったんは第一線を退かれた。しかし、歩行障害などは残ったものの順調に回復、その後も大学校付設の日本文化研究所の設立に参画され、所長を兼務される等の活動を続けられた。

したがって、姜先生が晋州市の名士であることは言を待たないが、驚愕したのは八百組の結婚式の主禮を勤められたことである。韓国の主禮は、日本の媒酌人、欧米の神父、さらには来賓代表を兼ねたような役割であるが、八百組と言うのは想像を絶する。韓国でも結婚式は土日に集中するので、時には一日に三組も駆け巡ることがあったと言う。だから、晋州市内を先生と一緒に歩くと、実に多くの方が先生に挨拶をして行く。

結婚式と言えば、ある時、姜先生が主禮をつとめるので、結婚式に参席しないかとお誘いがあった。無関係な者が出て良いのか、ちょっとためらったが出席して驚いた。会場は市内でも有名な韓式レストランの式場。末席にでも、座らせてもらおう心積もりであったが、雰囲気はどうも異なる。当地の結婚式は、結婚式に結婚披露宴のイントロ部分をくっつけたようなものであるが、着席は自由で、しかも全くしまりがないのである。

「いいからここに座りなさい」と姜先生が案内して下さったのは、最前列の左側。どう見ても主賓格の席である。

新郎の友人が司会をするあたりは、日本と同じであるが、とにかくびっくりしたのは、結婚の誓いや主禮の祝辞の最中でさえ、私語が絶えず、ざわめいていることであった。式場と外部のロビーの扉は開いたままで、ロビーでの歓談が聞こえてくる。厳肅さなどとは全くほど遠い。

結婚式が終わると食事になるが、これももっと戸惑う。主禮ともなれば、両家から丁重にもてなしを受けるのかと思いきや、勝手に「披露宴会場」まで行って、勝手に食事をして帰るのであ

る。たしかにこの方式なら八百組も可能だと納得したが、テレビで見たソウルの結婚披露宴は日本と同じようだったので、地方色なのかも知れない。それにしても姜先生の名士ぶりは大変なものであるが、尊大なところが全く見られないのが心地よい。

姜先生の参画された慶尚大学の日本文化研究所は、今も韓国における日本語教育のメッカである。日本の士官学校に学んだ朴大統領は、産業近代化や教育制度の充実、山野の緑化に多大な業績を残したが、反日風土の最中に、慶尚大学に日本語学科を初めて設置した。初代の日本語教授は、朴大統領自ら指名した外交官出身の李相濼名誉教授で、私も大変親しくさせていた。韓国の全ての学会がソウル所在の大学に本部を置く中で、日本語教育学会だけが慶尚大学にあるのもその歴史ゆえである。

初代の李相濼先生は、大学における日本語教育の基盤を支えるために、基金を有する日本文化研究所の設立を望んでいたが、全くの四面楚歌であった。日本語に近づくことさえも忌避されるのが一般の雰囲気の中で、姜東湖先生だけが、毅然としてその推進役を引き受け、在日韓国企業人などを訪ね、財政基盤の確立のため奔走された。法科大学学長等の要職にあったことも学内の雰囲気を変える大きな力となった。

姜先生は、真に日本ひいきの硬骨漢で、しかも日本語が完璧であった。小学生の頃から、真田幸村や猿飛佐助、霧隠才蔵を耽読し、後年になってからも、美空ひばりや都はるみの演歌を口ずさむなど、意外な面を持っておられた。もちろん、日本の書物も多読されており、日本語で書

きになったご自身の論文をチェックしてほしいと言われた時など、古風な表現があっても、格調高いものであり、とても修正する気持ちにはなれなかったほどである。

その姜先生は、韓国の非差別民「白丁」の開放運動、すなわち晋州市で起った衡平運動についても強い関心を持っておられた。

五年ほど前のことであるが、姜先生の友人、金仲燮教授の著書『朝鮮の被差別民・白丁その歴史とたたかい』の日本語版が企画された時、在日の方が翻訳を担当したが、原稿をご覧になった姜先生が大幅に手を入れられた。拝見すると姜先生の修正の方が内容的にも、言葉としても圧倒的に優れているのである。ぜひ監修者としてお名前を載せられるようにお薦めした結果、やっと了承して下さった。姜先生の日本語の書物はこの一冊なので、私としても良かったと思っている。

ところで、この衡平運動は、日本における非差別民解放運動と対比すべきものなので、そこから姜先生に左翼的な思想を汲み取るとしたら大間違いである。むしろ、姜先生が敬愛していた叔父が北朝鮮ゲリラにより処刑されたことで、徹底した北朝鮮嫌いであった。要は、反日や反共などに囚われず自由人であったということである。

それは、非差別民問題に関連して行われていた大阪の和泉市と晋州市の間の交流にも見られる。姜先生は、両市の交流を単なる社会、文化、学術的なものに留めず、日韓の小学生のサッカー交流として定例化し、交流を一般市民レベルまで拡げられた。姜先生が亡くなられた時に、和泉市でわざわざ追悼集会が行われたほどである。

姜先生には五歳年下の弟、姜東鉦さんがいる。晋州市内の有名な女子高校の校長先生をつとめられた方で、姜先生とは別の意味で好男子なのであるが、顔は全く似ていない。失礼ながら、母親が違うのかと思ったことさえあるが、実に兄想いの方である。

この東鉦さんもまた日本語が上手なのである。日本語の教育を受けた世代ではなく、日本で生活したこともないのに、日韓の学校間の交流などを機会に独習したという。NHKテレビを見ていて、判らないことがあると直ぐに姜先生に電話して確かめるほどの熱心さなので不思議ではないが、足掛け八年も韓国に通っていて、東鉦さんと話す時は日本語になってしまふのだから、ちょっと恥ずかしい。

その姜先生兄弟が日本に見えた時、北海道を旅行された。日本語に不自由のないおふた方なので、東京発の格安四日間のツアーを紹介したところ、大変よろこんで頂けた。誰でもそうであろうが、正規の航空運賃にも満たない割安な費用で、しかも収穫の多い旅行であったならば満足感がある。

それと共に、私達夫婦でお二人を鎌倉などにご案内したことも大変喜んで頂けた。よほど鎌倉がお気にめしたようで、その後、お会いする度に鎌倉の話題になった。

そのこともあってか、姜先生はしきりに韓国の済州島に行こうと私達夫婦を誘って下さった。おそらく、鎌倉の返礼の意味であろうと、何かと理由をつけて、延ばすようにしていたが、これ以上に遠慮してはかえって失礼になるかと、ご一緒することにしたのが、平成十五年の十月である。

濟州島はもちろん韓国最大の観光地。今でも、教え子達が新婚旅行地として出かけて行く。死火山である標高一九五〇メートルの漢拏山ひとつでできあがっている島には、日本や中国からの直行便もあり、高級ホテルも多く国際会議などの誘致も盛んである。

私達夫婦はいったん晋州市に入り、姜先生兄弟と合流して、近くの泗川空港から濟州島に向った。この泗川空港は、中学生になったばかりの姜先生が建設に動員された飛行場の後身で、今でも軍用機の発着が優先している。

濟州島は人口五十五万の小さな島でありながら、大型機の発着がひきりなしである。年間五百万人を越える観光客のほとんどが、航空機を利用するので、関西空港にも匹敵する規模なのである。姜先生は、この歴史もあり温暖で近代化された濟州がとても気に入っておられ、三日間の日程で宿泊ホテルから観光案内のタクシーまで全て準備して私達を招待して下さったのである。

漢拏山を中心とした三百六十にもおよぶ群小火山群は、韓国で初めてのユネスコ世界自然遺産であり、その中でも、島の東端にある城山日出峰は奇景である。直径六百メートルの火山が百メートルほどの高さの断崖で取り囲まれており、城塞のような様相を呈していて、おそらく世界中でも類する所がないのではなからうか。

三日間で島の観光地を一巡した。司馬遼太郎がわざわざ『街道をゆく・耽羅紀行』を書いた地である。徐福伝承の地でもあり、かつては耽羅国として独立していた土地柄。モンゴルが十三世紀に高麗朝を屈服させた時、この濟州だけを直轄領として、モンゴル騎馬軍の保駐屯地としたの

も、草原の地だからだった。李朝時代は政治犯の流刑地でもある。

印象に残ったのは、オランダ人ヘンドリック・ハメルが漂着した西帰浦で、それはちょうど三百五十年前の出来事であった。徳川家康がウイリアム・アダムスやヤン・オースティンを活用したの比べ、李朝はハメルを囚人扱いして、近代化に乗り遅れる流れを作ってしまった。一度は、文化比較として書いてみたいテーマである。

それより何より、びっくりする事があった。

たまたま泊ったホテルで、そのホテルのカジノのレストラン責任者をしている岩永さん夫婦に再会したのである。岩永さん夫婦には、前に慶州の朝鮮ホテルに泊った時も会った。妻が、変体仮名の仲間たちと利用していた寿司屋の二代目で、韓国人の奥さんと共に、ホテルの日本食店を任されていたのである。その後、濟州島に場所を変えたことだけは知っていたが、泊ったホテルでの偶然の出会いであった。

「顔の広い」ことを韓国では「脚がひろい」と言うが、姜先生兄弟の前で、ちょっと誇らしい気持ちになって、楽しいお酒と食事となった。

その濟州旅行が、姜先生との楽しい思い出の最後となった。その後まもなく、体調を崩され、入退院を繰り返す日々となってしまった。

発病される直前、ちょっとした事件があった。濟州で撮った写真を、とりあえず普通の用紙に大きく印刷してお持ちした。満足そうに写真をご覧になった後で、「実はちょっと親族の事で困っ

たことが起っていて……」と話されたのである。内容は伺わなかったが、「前の大病の時に死んでいれば良かった」と奥様に言っていて、「死んでしまっていたら新井先生と旅行もできなかったでしょう」と叱られたとも言われた。

親族のこととしては大袈裟な思っていたが、実はご子息がキリスト教に入信した「事件」が起ったのである。それは、幼い頃から、儒教の祭祀に際しては、祖父の代理まで勤め、守り続けてきた名門儒家の伝統が、足元から崩れて行くような、耐え難い思いだったのであろう。

最後の旅行を共にし、しかも身内でもない私に「事件」について話されたのも不思議なご縁であった。

姜先生の墓地には、墓銘碑が建ち、前面にはハングルで追悼詩が刻まれている。

嗚呼 姜東湖学長

姜東湖学長 あなたは二十世紀、この国の法学者、
社会指導者

法が花のようにばつと咲く温かい社会

その社会を築くため庭を拡げ

その社会を築くため早馬のごとく

地域や機関を問わず年中無休で奔走した

あなたは あなたはこの社会を築くために生れた人

ひとを愛し分かち施し

この地を愛して信頼の香りを醸成し

文化を愛し 韓日親善に火を灯し 志高く歩んだ

あなたのこの力は 孝心の花びらから出て

雪のように美しい奥様の支えから生れた

嗚呼 姜東湖学長

誰も行くことのできない道 その道を行ったひと

あなたは あなたは二十世紀 この国の法学者

社会指導者

詩 カン・ヒグン

おそらく、散策を兼ねての墓参は、これが最後になるだろう。こんど来る日は、タクシーでの墓参になるかも知れないが、この小文をそっとお供えしたい。

『まんじ』は姜東湖先生の愛読書であった。